新入学生の楽典テストに関する一考察

Ⅱ —— ま と め

菊 本 哲 也

は じ め に

昭和52年度に続いて，東京女子体育大学体育学科・東京女子体育短期大学児童教育学科の，昭和53年度新入学生に実施した楽典テストの結果から，今回は記譜に関する部分を52年度の結果に対照させて考察を行ない，2ヶ年にわたったテスト結果から，一応の結論と問題点を追究しようとするものである。

研 究 方 法

楽典テストの実施

昭和53年度新入学生に，ソルフエージュの最初の授業内で60分のテストを実施した。

テスト受験者

東京女子体育大学体育学科1年	282名
同短期大学児童教育学科1年	252名
	計534名

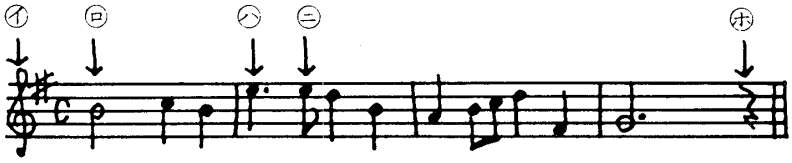
テストは短大保健体育学科を含む全1年生に実施したが，ここでは体育学科の人数に近い児童教育学科A・Bクラスのみをとりあげることとし，保健体育学科および児童教育学科Cクラスについては省略した。

テスト内容

52年度のテストと同じ問題を出題し，1問だけ変更してみた（後述）。

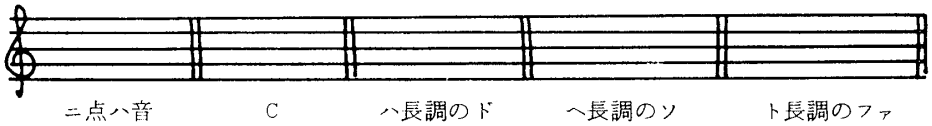
はじめに出身高校・音楽経験（楽器経験）・クラブ経験・芸術選択などを記入。

問1. 次の旋律について答えなさい（52年度の問2.に相当）。



1. 各音符の下に階名をカタカナで書きなさい。
2. この曲は（　　）調，（　　）拍子です。
3. ㋑－㋭の記号や符号の名称を答えなさい。

問2.　次に指定した音を，全音符で記入しなさい（52年度の問4.に相当）。



二点ハ音　　C　　ハ長調のド　　ヘ長調のソ　　ト長調のファ

問3.　次の（　）内に，正しい音符または休符を記入しなさい。

※　1ケだけ記入すること。

この問3.は，今回新しく出題した問題であり，音符の名称を記入させる問1.に対して，音符そのものを記入させようとするものである。なお，52年度の問3.速度標語（楽語）の問題は，この問題といれかわったことになる。

以上の内容であるが，紙面や資料整理の都合などから，ここでは問2.と問3.の記譜に関する部分だけをとり上げ，問2.については52年度の結果に対照させながら考察を進めることにする。また，前回と同様に，結果と考察は各問ごとに行なうことにする。

結果と考察

1.　日本音名（二点ハ音）

表－1　日本音名（二点ハ音）

	体育	児教	合計
学生数	363 282 645	392 252 644	755 534 1,289
正解	49 (13.49) 66 (23.40) 115 (17.82)	60 (15.30) 48 (19.04) 108 (16.77)	109 (14.43) 114 (21.34) 223 (17.30)
減点	5 (1.37) 3 (1.06) 8 (1.24)	8 (2.04) 5 (1.98) 13 (2.01)	13 (1.72) 8 (1.49) 21 (1.62)
その他の解答	48 (13.22) 29 (10.28) 77 (11.93)	70 (17.85) 45 (17.85) 115 (17.85)	118 (15.62) 74 (13.85) 192 (14.89)
無回答	261 (71.90) 184 (65.24) 445 (68.99)	254 (64.79) 154 (61.11) 408 (63.35)	515 (68.21) 338 (63.29) 853 (66.17)

註：上段は52年度，中段は53年度，下段は合計であり，（　）内はパーセンテージを示す。

問2.－1は日本音名による記譜であるが，５２年度と同様に無回答が多いことがひときわ目につく。２ヶ年にわたるテスト結果がこのようにあらわれている以上は，日本音名の失墜を認めざるを得ない。前回の報告に「正しく理解させることが大切……」と述べたが，この結果からは，もはや日本音名の復権は容易でないことがうかがわれる。むしろ，一部の専門家の間だけに通用するものとしておき，教育の場での無理強いは一考せねばならないのかも知れない。しかし，正解者のパーセンテージがわずかに増えていることが，かすかな救いとなっているともいえよう。

もちろん，階名唱法（移動ド唱法）を義務づけた文部省指導要領の実施の成果が，後の階名による記譜（問3.）にあらわれてはいるものの，一方では音名の軽視を生むことになったという見方も，あながち否めないであろう。なお，その他の解答では，５２年度とほぼ同様な解答が見られた（東女体大紀要第１３号参照）。

2. ドイツ音名（C）

表－２ ドイツ音名（C）

	体育	児教	合計
学生数	363 282 645	392 252 644	755 534 1,289
正解	74 (20.38) 41 (14.53) 115 (17.82)	97 (24.74) 69 (27.38) 166 (25.77)	171 (22.64) 110 (20.59) 281 (21.79)
減点	35 (9.64) 3 (1.06) 38 (5.89)	33 (8.41) 0 (0) 33 (5.12)	68 (9.00) 3 (0.56) 71 (5.50)
その他の解答	43 (11.84) 72 (25.53) 115 (17.82)	67 (17.09) 57 (22.61) 124 (19.25)	110 (14.56) 129 (24.15) 239 (18.54)
無回答	211 (58.12) 166 (58.86) 377 (58.44)	195 (49.74) 126 (50.00) 321 (49.84)	406 (53.77) 292 (54.68) 698 (54.15)

問2.－２は，一点，二点などのオクターブの違いに無関係な，ドイツ音名による記譜であるが，５２年度と同様にジャズ・コードネームと感違いした解答がかなり見られた。また，この問は問2.－１に次いで，これも５２年と同様に無回答が多い。

５２年と異なる結果としては，減点が今回は少ないことである。そのかわりにその他の解答が増えている。この後の３つの問の減点は，５２年度とあまりかわらないが，それは全音符以外の音符を書いたための減点ではなく，誤まった調号を記入したために生じた減点であり，今回は解答できたもののほぼ全員が全音符を理解できていたようである。このことは後の問3.の音符の記入が良い結果であることからもうなづける（4.音符参照）。

3. 階名（ハ長調のド・ヘ長調のソ・ト長調のファ）

この3つの問は，前回と同様にまとめて考察を進めることにする。

表－3　階名（ハ長調のド）

	体育	児教	合計
学生数	363 282 645	392 252 644	755 534 1,289
正解	280 (77.13) 201 (71.27) 481 (74.57)	316 (80.61) 205 (81.34) 521 (80.90)	596 (78.94) 406 (76.02) 1,002 (77.73)
減点	40 (11.01) 46 (16.31) 86 (13.33)	40 (10.20) 30 (11.90) 70 (10.86)	80 (10.59) 76 (14.23) 156 (12.10)
その他の解答	11 (3.03) 13 (4.60) 24 (3.72)	11 (2.80) 10 (3.96) 21 (3.26)	22 (2.91) 23 (4.30) 45 (3.49)
無回答	32 (8.81) 22 (7.80) 54 (8.37)	25 (6.37) 7 (2.77) 32 (4.96)	57 (7.54) 29 (5.43) 86 (6.67)

表－4　階名（ヘ長調のソ）

	体育	児教	合計
学生数	363 282 645	392 252 644	755 534 1,289
正解	228 (62.80) 179 (63.47) 407 (63.10)	256 (65.30) 172 (68.25) 428 (66.45)	484 (64.10) 351 (65.57) 835 (64.77)
減点	31 (8.53) 31 (10.99) 62 (9.61)	36 (9.18) 18 (7.14) 54 (8.38)	67 (8.87) 49 (9.17) 116 (8.99)
その他の解答	50 (13.77) 34 (12.05) 84 (13.02)	57 (14.54) 40 (15.87) 97 (15.06)	107 (14.17) 74 (13.85) 181 (14.04)
無回答	54 (14.87) 38 (13.47) 92 (14.26)	43 (10.96) 22 (8.73) 65 (10.09)	97 (12.84) 60 (11.23) 157 (12.17)

表－5　階名（ト長調のファ）

	体育	児教	合計
学生数	363 282 645	392 252 644	755 534 1,289
正解	226 (62.25) 172 (60.99) 398 (61.70)	256 (65.30) 175 (69.44) 431 (66.92)	482 (63.84) 347 (64.98) 829 (64.31)
減点	29 (7.98) 28 (9.92) 57 (8.83)	28 (7.14) 17 (6.74) 45 (6.98)	57 (7.54) 45 (8.42) 102 (7.91)
その他の解答	54 (14.87) 38 (13.47) 92 (14.26)	56 (14.28) 34 (13.49) 90 (13.97)	110 (14.56) 72 (13.48) 182 (14.11)
無回答	54 (14.87) 44 (15.60) 98 (15.19)	52 (13.26) 26 (10.31) 78 (12.11)	106 (14.03) 70 (13.10) 176 (13.65)

この階名による記譜は，５２年度・５３年度共に，ほぼ同数値となっていることがわかる。また，正解と減点（前回は準正解としてとりあつかった）を合わせた数値では，ハ長のドが約９０％，その他は７０％余りとなっており，この数値から，いかに階名の理解度が高いかがうかがえる。

4. 音符（リズム譜）

この問3.のリズム譜による問題は，拍子記号や音符の種類を理解して，きちんと書けるかどうかを問うものである。

表－6　音符（リズム譜）

	体育　282	児教　252	合計　534
正解　4	54 (19.14)	69 (27.38)	123 (23.03)
正解　3	153 (54.25)	129 (51.19)	282 (52.80)
正解　2	30 (10.63)	24 (9.952)	54 (10.11)
正解　1	18 (6.38)	14 (5.55)	32 (5.99)
正解　0	9 (3.19)	4 (1.58)	13 (2.43)
無回答	18 (6.38)	12 (4.76)	30 (5.61)

この結果からは，一見正解率２３.０３％という低い数値が気になる。しかし，正解３（４問中３問正解）が５２.６２％もあることに着目して，全答案を調べなおしてみたところ，次のようなことがわかった。

問３のリズム譜はアウフタクト（Auftakt 独＝弱起）であるが，その場合，最初と最後

の小節は，いわゆる不完全小節となっている。つまり，この２つの小節を合わせて，はじめて他の小節（完全小節）と同じ拍数となるのである。

3／4拍子のこのリズム譜の場合，最初の小節は四分音符１ヶ，すなわち１拍分であるから，最後の小節は2拍分で良いことになる。しかし，すでに１拍分の四分音符がしるされており，さらに（　）内には１ヶだけ記入することになっているから，正解は四分音符あるいは四分休符を記入することになるのである。

これらのことを理解してなかったために，様々な音符や休符（多くは二分音符か二分休符）が記入されており，結果的に３問正解にとどまったものが多かったわけである。

そこで，正解３のうち，最後の問だけ出来なかった数を正解４（満点）に加えてみると次のようになり，不完全小節の拍数のそろえ方は知らなかったものの，一応正しい音符を記入出来るものが７０％余りいることがわかった。

	体育　282	児教　252	合計　534
正解　4	54 (19.14)	69 (27.38)	123 (23.03)
前3問正解	136 (48.22)	118 (46.82)	254 (47.56)
合計	190 (67.36)	187 (74.20)	377 (70.59)

まとめ

２ヶ年にわたった楽典テストの結果から，記譜に関しては次のようなことがわかった。

○音名は２０％ほどしか理解されていない。

○階名は７０％以上が理解している。

○音符は７０％余りが理解している。

これらの結果からは，いわば実用度の高い階名と音符（休符）は良く理解されているが，音名は日本語，ドイツ語を問わず，理解度が低いことが明白となった。たしかに音名は，一般に音楽の専門家しか用いていないようであり，なかでも日本音名は社会的にもほとんど活用の場がない。ドイツ音名はジャズ・コードネームなどの英米音名と混同されながらも，社会活動の一部に活きており，このことは日本人の日本語離れや，反対にどうかと思われるほどの欧米語のはんらんする現在の言語社会を反映しているかのようでもある。また，前回報告した音符の名称の誤字や当て字にも，そのことが如実にあらわれていた（東女体大紀要第１３号参照）。

ところで，体育学生と児教学生との相違であるが，日本音名だけがわずかに児教の方が低い数値となっているほかは，いずれも児教の方が高い数値となっている。前回も述べたように，児教の特性からは，もっと高い数値を期待したいところであるが，これも現在の大学進学のシステムを物語っているのであろう。我々の若い頃（２０年余り前）は，ピアノ（音楽）の得意なものは，まず音楽学校や学芸大学の音楽科へ進学し，その能力が少し不足と思われるものが幼児教育を目指したものである。つまり，大学受験以前に，すでに音楽的技能をある程度備えているものが幼児教育への道を選んだのである。しかるに，今日では受験対策としてまず学科を学び，専門科目は大学へ進んでからという考え方で済むようになってしまった。そして多く

の幼児教育系の学校（大学・短大・専門学校）では，受験時にピアノに代表される音楽テストはなく，2・3の学科試験だけとなっている。ピアノのテストを実施すると学生が集まらないとさえ一部にいわれており，そのためにピアノ・テストをやめた学校もあるほどである。しかし，目指す学校へ入学しても，2年そこそこのピアノ・レッスンや講義形式での理論，それも多人数を一定時間内に消化することが多く，とても十分な指導のできるはずがないのが実状である。その結果によるものであろうが，最近の幼稚園や小学校の先生は，たくみにピアノをこなし，きれいな声で歌唱できる人が少なくなったように思われる。

「教育は音楽だけではない・・・」と，一部の識者に意見されたこともあるが，しかし短期間にマスターできないピアノ実技などは，受験前に練習しておくか，でなければ入学後に十分な指導のできる施設と指導者，そして時間が必要である。とはいえ，学校経営上の問題や，文部省の設置基準などをたてにして，なにやらおそまつな音楽教育となっている場合が多く，やはり入学前の予備学習を欠いてはならないということになろう。この意味においても，この楽典テストの結果で体育を目指す学生と児教を目指す学生とが，ほぼ同程度の能力であることは，大いに気がかりなのである。

児教の重要な特性の一つである音楽領域において，体育系の学生と大差がないということは，学生たちの児教への認識不足ということになるのではあるまいか。それとも，特性がなくても学科テストだけでたやすく入学させる大学側に問題があるのか，さらに，やがて就職してゆく受け入れ側，少なくとも幼稚園では，このような音楽能力が問題とならないのであろうか。

2ケ年にわたる楽典テストの結果を参考にして，今後はこのような問題点をできるだけ追究してみたいと思っている。

参考資料

○標準音楽辞典　音楽之友社
○新しい音楽通論　菊本哲也著・全音楽譜出版
○新入学生の楽典テストに関する一考察
菊本哲也・東京女子体育大学紀要第13号
○小学校学習指導要領・幼稚園学習指導要領・文部省